

『リアルもデジタルも』 いきいきとつくる 豊かな長寿社会

人生 100 年時代で長寿リスクが存在するなかで高齢者が健康を維持し、地域社会に参画していくためにはどのようにすればよいのか、デジタルの果たす役割にどのようなものがあるのかを示していきます。

令和 3 年度

高齢社会フォーラム オンライン

13:00 開会挨拶 ▶ 13:10 基調講演 ▶ 14:00 高齢社会対策説明 (内閣府) ▶ 14:20 分科会 ▶ 16:30 閉会

・基調講演・

『リアルもデジタルも』いきいきとつくる 豊かな長寿社会

新型コロナウイルスの流行で、外出や社会参加・交流などの自粛が余儀なくされました。その結果、うつや高齢者のフレイル・要介護状態・認知症発症のリスクが高まると同時に、その予防策も見えてきました。スマホやパソコンを使ったビデオ通話などデジタル技術の利用を増やした高齢者では、うつなどのリスクが3~4割も少なかったのです。一方で、感染症が落ち着いたら、リアルな対面での交流や社会参加なども再開して、2年間に落ちてしまったところから健康を取り戻すことが大事です。未知の新型コロナウイルスの流行は約10年に1度繰り返しています。次の流行に備え、『リアルもデジタルも』組み合わせたハイブリッドな豊かな長寿社会をつくるヒントをお話します。



近藤 克則 氏

千葉大学予防医学センター 社会予防医学研究部門 教授
国立長寿医療研究センター 老年学・社会科学研究センター 老年学評価研究部長
一般社団法人 日本老年学的評価研究機構 代表理事

1983年千葉大学医学部卒業。東京大学医学部付属病院リハビリテーション部医員、船橋二和(ふたわ)病院リハビリテーション科科長などを経て、1997年日本福祉大学助教授、University of Kent at Canterbury (イギリス) 客員研究員(2000-2001)、日本福祉大学教授を経て、2014年から現職。千葉大学予防医学センター社会予防医学研究部門教授。2016年から国立長寿医療研究センター老年学・社会科学研究センター老年学評価研究部長を併任。2018年から一般社団法人日本老年学的評価研究機構代表理事(併任)。「健康格差縮小を目指した社会疫学研究」で2020年度「日本医師会医学賞」受賞、「健康格差社会一何かが心と健康を蝕むのか」(医学書院、2005)で社会政策学会賞(奨励賞)受賞。
近著:「健康格差社会への処方箋」(医学書院、2017)「研究の育て方」(医学書院、2018)「長生きできる町」(角川新書、2018)

本年度も
新型コロナウイルス
感染症対策のため、
オンライン配信
となります。

〈参加費：無料〉
〈登録：不要〉

視聴方法はこちらの
QRコードがURLから
ご確認ください。



<https://www8.cao.go.jp/kourei/kou-kei/r03forum/kaisai2.html>

令和 4 年 1 月 17 日 (月) 13:00-16:30

・第1分科会

心身の能力が低下する高齢者の生きがいと社会参加



コーディネーター

樋口 恵子 氏

東京家政大学 名誉教授

平均寿命マイナス健康寿命の期間は、男性は9年、女性は12年もあります。この間の高齢者の地域のあり方、「健康」と生きがい・社会参加に焦点をあてて考えてみたいと思います。

パネリスト



永田 久美子 氏

認知症介護研究・研修東京センター
副センター長(兼) 研究部長

新潟県三条市出身。千葉大学大学院看護学研究科修了。学生時代より、認知症になってからも自分らしく生きられる地域社会をテーマに研究と活動を続けている。東京都老人総合研究所(現、東京都健康長寿医療センター研究所)を経て、2000年より現所属。認知症の本人の発信と社会参加の推進、本人の視点にたった人材とチームの育成、各地域の特性を活かした本人参画の地域共生の推進、行方不明にならずに外出を続けられるまちづくりなどに注力している。2016年からNHK「認知症とともに生きるまち大賞」選考委員長。



小川 晃子 氏

認知症当事者と配偶者の自助グループ「かます」活動者

岩手県立大学名誉教授。ICTを活用した高齢者の見守り「お元気発信」を岩手県と連携し事業化。夫が4年前にアルツハイマー型認知症と診断される。認知症カフェで出会った仲間とともに当事者が活躍できる場づくりや、「時計屋カフェ一座」の講演等もしている。



新田 國夫 氏

全国在宅療養支援診療所連絡会 会長

医師。帝京大学病院第一外科・救急救命センターなどを経て1990年に東京都国立市に新田クリニックを開設し、在宅医療を開始。1992年に医療法人社団つくし会を設立し、理事長に就任。一般社団法人全国在宅療養支援医療協会会長、一般社団法人日本在宅ケアアライアンス理事長ほか。高齢者医療に力を入れ、高齢の障害を持った患者さんに24時間対応をおこなうなど在宅医療の第一人者。認知症になっても社会とかがわかって暮らす方策を聞きたいと考える。

事例発表者



稲葉 敬子 氏

NPO法人高齢社会をよくする女性の会 理事

高齢社会をよくする女性の会理事。ナースとして、慶応大学病院、ソニー本社勤務後出版社で育児・健康関連部門の編集部長、取締役企画室長歴任。五十代で介護福祉士として福祉分野専攻。城西国際大学兼任講師。介護ジャーナリストとして執筆活動のほか、20年余FM局で「稲葉敬子のラジオマガジン」担当。

・第2分科会

世界と一緒に考えよう！ アクティブシニアの社会参加



コーディネーター

松田 智生 氏

三菱総合研究所 未来創本部
主席研究員・チーフプロデューサー

新型コロナウイルス感染症は日本の高齢者の暮らしに大きな影響を与えました。それでは海外の国ではどうでしょうか？本分科会では「世界と一緒に考えよう！アクティブシニアの社会参加」をテーマに、高齢化率の先進国のドイツ、イタリア・日本からパネリストを迎え、アフターコロナ、ウィズコロナの時代における各国の状況や取組みについて報告します。パネリストディスカッションでは目指すべき高齢社会像について討議を展開します。

パネリスト



パオラ・カヴァリエレ 氏

大阪大学大学院
人間科学研究科 特任講師

専門はジェンダーの宗教社会学。ヴェネツィア大学日本学修士取得後、東京大学大学院人文社会科学系研究科に入学。2012年に英シェフィールド大学大学院東アジア研究科・東北大学大学院法学研究科国際共同博士取得。災害レジリエンスとジェンダー研究を行う。日本在住約15年。



フランツ・ヴァルデンベルガー 氏

ドイツ日本研究所 所長

1961年、ドイツのプファルツ地方で生まれる。ケルン大学社会科学部卒業後、上智大学に留学し日本文化に親む。ケルン大学助手、ドイツ日本研究所日本経済部長、ミュンヘン大学経営学部日本経済研究所所長などを経て、2014年より現職。専門は経済学、国際制度比較、コーポレートガバナンスなど。



堀田 一芙 氏

一般社団法人 熱中学園代表理事

1969年慶応義塾大学経済学部卒業。日本アイ・ピー・エムではPC販売事業部長、ソフトウェア事業部長など常務取締役として歴任。日本アイ・ピー・エムを退社した後は、2011年の震災を機に、「もういちど、七歳の目で世界を・・・」をコンセプトにした大人の社会塾「熱中中学校」を全国展開している。

・第3分科会

コロナ禍から地域コミュニティの底 力を磨く：ポイントはオンライン『も』



コーディネーター

澤岡 詩野 氏

公益財団法人ダイア高齢社会研究財団 研究
部主任研究員 / 工学博士 / 専門社会調査士

ながびくコロナ禍、つながりを紡ぎ続けるためにオンラインの活用にはチャレンジした地域も少なくありません。これはコロナを乗り越えるためだけではなく、新たなつながりを生みだしたり、身体に大変なことがあっても長く社会に関わり続ける手段を得たこととも言い換えられるのではないのでしょうか。第三分科会では、異なる立場のお三方と共に、コロナ禍のチャレンジから見えてきた可能性を発信します。

パネリスト



齊藤 むつみ 氏

公益財団法人 長野県長寿社会開発セン
ター シニア活動推進コーディネーター

平成21年～27年の6年間、(公財)長野県長寿社会開発センターが主催する長野県シニア大学長野野学部の事務局担当。新たな出会いや発見を求めて入学する多くのシニアと出会う中で、「経験」というシニアならではの豊かな蓄え(可能性)に触れる。現在は、同センターのシニア活動推進コーディネーターとなり、県内のシニア世代やそれを取り巻くさまざまな団体とつながることで「人生二毛作」のウェーブを起こそうと日々奮闘中。「いくつになっても私らしくあるためのサポートが仕事」。



中山 浩一 氏

中野区宮崎町会 会長



朝倉 才 氏

中野区宮崎町会 副会長

地域活動が活発な中野区でオンライン活用にも早くからチャレンジしてきた町会。コロナ禍には回覧板を中止やサロン休止をするなかで、これまでのオンラインの取組に加え、ネット de 回覧板、Zoomの活用など「コロナ禍だからこそできる地域活動」を実践している。

江口 直子 氏

地域包括支援センター 看護師

大学病院の救命センターに約10年勤務し、平成16年から社会福祉法人若竹大寿会横浜市東区尾地域ケアプラザ勤務。在宅介護支援センターの看護師を経て地域包括支援センターの看護師として勤務。令和2年4月横浜市片倉三枚地域ケアプラザに移動し、現在に至る。